



まらち キラ

魔法少女つてたいへん!

小説 さかき傘
挿絵 浅沼克明

立ち読み版

アバンタイトル

第一話 変身するの？ 魔法少女つてたいへん！

第三話 困惑の二学期 夢見る魔法少女

第七話 どうなってるの？ 魔法少女の異変

Cパート

006

008

104

147

247

登場人物紹介

Characters



ともえ 十萌きらら

金髪のツインテールが目を引き元気な女の子。使い魔エマによって“魔法少女キララ”に変身する力を与えられ…!?



ひらさか 平坂ミサト

きららの友達のひとり。胸も大きく、体つきも大人びたメガネ少女。おとなしい性格。



エマ

ピンク色の小さな使い魔。人間の欲望を暴走させるマカイジュの種を回収するため、きららの元に現れた。



こはま 小浜ライカ

きららの親友のボーイッシュな女の子。運動好きで、いつもは体操服+ブルマの服装がトレードマーク。



みやしろしゅんや 宮代俊哉

きららの同級生。根暗な性格の肥満少年。

さやま 佐山アキラ

きららの同級生のキザな男子。タダシとは仲が悪い。

くにとり 国鳥タダシ

きららの幼なじみの元気な少年。よくケンカするが、実はきららに淡い恋心を寄せている。

タダシ。その名前が出て、衝撃が増す。

無理やりキスされた。非のないことなのに、幼なじみへの強烈な慙愧と罪悪感が湧く。あの幼なじみへのことを好きだと意識したことはない。いつも隣にいて当然のやつだったから。

けれどキララの中では、自分がファーストキスをするなら、それは当然あいつだとばかり思っていた。

(できなくなっちゃった……。タダシと、ファーストキス)

思った途端、少女はもう胸にこみあげていたものを我慢できず、

——ぼろっ。

ツリがちな猫目から、大粒の涙がこぼれる。

「あう……う」

抵抗にと強張っていた少女の肢体から、力みが急激に抜けていった。

細い腕も、足も、投げ出すように脱力させる。何もかもあきらめたように。

キスされて泣いてしまう女はよくいると、アキラは涙など気にせず続ける。

少女が抵抗する氣勢をなくしたのをいいことに、

——ヌル。

「むふ……っ」

花のような甘い香りをたたえた柔らかな内部へ、舌を進行させだした。

(え？ え？ なにこれ、……舌？)

気づいたときには口のなかに進入されている。

無防備な歯の奥、裏側や舌の下粘膜がくすぐられた。

(やっ、やっ、離して、離れて……っ)

口の中がくすぐりたい。生まれて初めての得体の知れない感触だった。舌を舐められるたびゾクッ、ゾクッと面妖な電気が走り、鳥肌を立てるキララ。

混乱と驚きで嘔みつくことさえ思いつけないでいるうちに、舌をすくいとられてしまう。ねろねろと少年の口の中で甘く嘔まれたり舐め回されたり。

アキラは狡猾に目を細めながら、奪った舌をストローにして少女の唾液をすすった。

「んふう……ん」

口の中から唾液を奪われるというこれまた初めての感覚に少女は目を白黒させる。混乱のさなかどろりと唾液を返されれば、知らず知らず飲んでしまった。

初めてキスされた女の子がどうすると抵抗できず、どうするとディーブなベーズに応じてしまうか、女たらしのクラスメイトは知り抜いていた。

一端離すときも、両方の耳の穴に指をあててくすぐり続ける。

耳は微弱ながら性感スポットであり、触られると抵抗できない女は多い。

「へへ、美味^{うめ}え。最高だよ十萌、ずっとお前とキスしたかったんだ」

「な……なう、なんてこと」

「おい宮代、しばらくお前はキスNGな。十萌の唇、俺専用にするから」

言いながら、またちゆると少女の口を塞ぐ。

「まったく独占欲の強い……。ま、いいよ。代わりに僕はこっちをもらうから」

一方の俊哉がパンティを持ちあげるのをやめた。

「ンふ……」

クロッチが食いこむ痛み……。プラス、昔鉄棒にまたがったとき感じたようなウズつきがやんで、ほっとする少女。

だがすぐに、手は放れたのでなく、下に引つ張られたのだと気づく。

形のよいヒップが露出した。もこもこのパンツと裏腹にキュッと引き締まった、大人のモデル顔負けの形状に、俊哉が感嘆のため息を漏らす。

少年の興味はすぐさま中央の谷へ向き、

「思った通り、可愛いアナル」

両足が広がっている、門の肉が左右へよれている聖域を覗いた。

（やああ……見られてる、お尻見られてるよう）

妖しいキスと目もくらむ羞恥のダブルパンチに、キララはもう頭が真っ白だ。

アナルという単語がどんな意味か知らないのは幸いで。クラスメイトがお尻どころか、排泄のための穴を覗き。くんくんとにおいを嗅ぎながら皺の数を数えていると知ったら、卒倒していたかもしれない。

気づいたのは先ほどのミサトを思い出したときで。

「へへ、いただき」

「きやうううあああああつ」

だが遅かった。ネチャリと汗だらけの指が、硬い小孔を押さえてくる。

「うわ、すげー熱いよ。これならちよつとほぐせばすぐイケるようになるな」

「なんだよ宮代、また最初は尻でイカせるのか？」

「オナニーもまだつぼいから記念にね。邪魔しないでよ、キスはあげたんだから」

きやあきやあ叫ぶ少女を無視して、まずマーキングをと、自分の汗や唾液を孔皺にすりつけた。

（うぐ……やだ、なんでお尻、お尻触るのお）

この世に排泄する孔を觸つて喜ぶ人間いるなんて知識、キララにはない。そちらを触る意味が分からず、涙を流して身をよじる。

だが抵抗は、綺麗なブロンドが揺れて男らを興奮させる以外効果なかった。

両手足は動かさず、押さえられた顔にはアキラが吸いついているし。腰をよじれば、逆に

肛門への刺激が強くなってしまふ。

少年たちは有頂天である。

ぷりんと瑞々しい餅肌は、触れているだけで陶然とするほどだ。相手が学園でも他と一戦を画す美貌の、十萌きららというだけで興奮するのに。

「ヒヒ」

薄ら笑いを浮かべ、美尻を剥く俊哉。

ふつくらした蕾はいくらいたぶつても一向に開く気配なく、接触を拒んでいる。その清纯そのものな反応が男のねちっこさを刺激した。

下着が両腿の付け根に引っかかっているのを見難いが、顔を寄せれば一番大切なところも見える。

縦向きのひびが入っただけのような肉唇は、見るからに幼げだ。百合の花びらを重ねたような清纯さで、俊哉が小さく相好を崩す。

一方のアキラも興奮していた。極度に自信家なため、技巧を駆使してキスだけでメロメロにするつもりだったが。我慢できないと手を胸元に戻す。

厚みは薄いのだが、腹部がへこんでいるため質感の強く感じられる乳丘を、くにくに揉みしだく。

「あつ、あんつ、んふつ、んぷううん」

サンドイッチ状態で猛烈な愛撫にさらされ、いつしかキララの身体も、甘い炎で炙られたような桜色に染まりだしていた。

(な、なにこの感じ？ ふわふわする……熱いよ)

ネチャネチャとかき回される口腔や、菊蕾、バストと、色々なところから未知の熱が湧いてくる。

『フフフ、思った通り感じやすいのね十萌さん』

アキラの後ろに回ったかよ子が、嬉しそうに言う。

「う……う、先生、もうやめて、やめてください」

弱気と淫熱とで頭が朦朧としたキララは、涙まじりに懇願する。

『嫌がらないの。先生はなにも貴女が憎くてこんなことしてゐるわけじゃないわ』

女教師は狂気的笑みを浮かべたまま、

『むしろ貴女たち生徒が可愛くて仕方ないのよ。……そう』

「ひあ……っ!!」

『舐め回したいくらい、貴女たちが大好きなの』

ずるりと舌を伸ばしスカートに差しこんできた。

にちやり、にちやり、腿の内側から幼い柔裂まで、生温かいものが這いずりだす。

先生の舌が伸びている。それが肌に触れているだけで気が気でない少女だが。こんな恥ずかしい場所を舐めるといふ行為には、鳥肌の立つ思いだった。

「やつ、先生やめてっ、そんなっ、汚いです、そこおしっこの出る……ひあああんっ」

『フフ、もうお汁がすごいわよ。キスとお尻だけでこんなに濡れるなんて。淫乱の素質充分ね』

「い、インラ……？ あうううう奥はだめええ」

蛇のように柔軟かつ巧みに動く舌は、幼いクレバスをめくり、熱のこもった蕩貝の身をしゃぶる。

（あううなにこれ。なんなの……この気持ち）

先ほどパンティで圧迫されたとき感じたものから、痛みを取り除いた、キュンとくるウズ痒さだけが渦巻き始めている。

プールの授業のあと耳に水が詰まって、急に抜けたときの、熱い水気が耳の穴を通る感覚が延々と続く感じ。

頭がおかしくなりそうだった。耳でなく股の下でトロトロ水気が伝っており、先生はそれを一滴残さず舐めている。

「へへ、乳首が立ってきた♪」

股下から舞いくる淫靡な熱は、乳房でも悪さをする。少女の意思など関係なしに充血し

始めた。

いつも子どもっぽく陥没している乳首は、ノーブラとはいえ服の上からでも、ヒク、ヒク、脈拍にのって痙攣する様子が分かるほど勃起してしまふ。

膨らみ全体を揉む手は止めず、人差し指と中指の間でキュツとつまむアキラ。

「ひああんっ」

「へへっ、イイ声だすじゃん」

幼い身体が快楽に目覚めだしている。悟った少年たちは、さらに息巻いて挑んでくる。

（あ、ああ、おっぱい恥ずかしい……やっ、お尻に指——）

つつしみ深い狭蕾を撫でていた俊哉の指が、肛内を目指しだした。

「あぶうっ、うっ、ううん、んふ、んふうん」

塞がれた唇の奥で激しく喉を鳴らす少女。その吐息は、もう痛みを訴えるものではなかった。

先ほどネチネチ尻穴をいじられてウツトリ頬を染めていたミサト。あの表情の意味が、ほんの少しだけ分かる気がする。

それだけ俊哉の指は巧みなのだ。筆でくすぐるような、触るか触らないかのタッチで尻谷を挑発し、肛門がヒクリと反応した瞬間、皺をめくってくる。

何度目かグリグリと押し揉まれたとき、括約筋はとうとう根負けして少年の中指を迎え

てしまった。

「ひああつ」

ずしんと、重みをぶら下げたような感覚が、お尻の穴から背筋にかけてを走る。

だがその悲鳴に痛みの色はなかった。

（あ、あれ？ なにこれ、変だよ。お尻のなか熱くなってる……あつ、ああ、お尻がへんな感じ）

「へへ、もうヌルヌルしたのがあふれてる。こりゃ生まれつきミサト以上の淫乱アナルだ」
『宮代君の触り方が上手いからよ。先生も初めてされたとき、簡単にイキ癖をつけられたもの』

男と女教師の野卑な笑いが、遠くに聞こえる。

第一関節まで入った指が、ツルツルと括約筋を弄ぶようにこすってくる。

するとお尻の谷間全体から不可思議な疼きが放たれるのだった。

トイレで大きいほうをするとき、まれに一瞬だけ感じる理解できない酩酊感。あれを何倍にも煮詰めた感じ。

「あ、あんつ、あああん」

「イイ声が出てきた。アナル大好きになってきたら」
にめぐりと指が第二関節まで進んだ。



アキラは処女膜を奪うまではガツガツしていたものの、そのあとは憎らしいほどに紳士的だった。

教師や、破瓜の様子を見にきた俊哉に見せつけるよう、ゆっくり、ゆっくり挿入を遂げていく。

加えて女教師も伸ばしたままの舌をうねうね揺らし、細い膣肉を緩めるマッサージを欠かさなかった。

ジェルのように柔軟に広がってペニスに場所を渡していく。

「ひ……ん、んん……うくああんいやあ」

強靱なペニスでみっちり広げられたヒダの畝が、ウネる舌で舐め回される。

破瓜の痛みはきわどく肌を焼いているのに、時おりピリッと甘美な電流が生じる。それは幼くても女のプライドがあるキララにとって恐怖だった。

(やだ、やだ私。無理やりおちんちん入れられて……え)

「狭あ、ちんぽ押し出されそうだけ。でも奥のほうはトロトロして……へへ、こりやチンポの味覚えるのも早そうだけ」

白い太ももの中央に、赤銅色した、少女の足首より太そうな肉が出たり入ったりする。征服感を刺激され、少年は子宮口を小突きながら我が物顔で上体をすり寄せてきた。キスされると思い、キララは慌てて顔を背ける。

「分かるか？ 俺の、こんなにギンギン。キララを女にできたのが嬉しくてさ」
男は構わず耳たぶへ口を寄せてきた。

いつの間にかファーストネームで呼ばれたことも含め、悔しさが怒りに転化する。

「ふざけないでっ、佐山君なんか大っキラい！ もう大嫌いだからっ！」

秘唇から迫りくる衝動をこらえ、怒鳴った。

いまの彼は正気をなくしていても、すること、言うことは本人の意思のはず。この浮気も侮蔑的な陵辱も彼の意思。許せるわけがない。

アキラは余裕の冷笑のまま、

「くくっ、身体は嫌ってなさそうだけど」

毛筆でも扱うかのように膨れた切っ先を揺らした。

「ひあああんっ」

深い部分を野太いカリで撫でられるのは、薄舌に優しく転がされるのとは別種の間接感を呼ぶ。

つい恥ずかしい声が出る。隙だらけな唇はたやすくアキラに奪い取られる。

（やああキス嫌。佐山君なんかとしたくない……のにい。ふああ舌が入ってくる、すごく長いよお）

言ってやりたい文句がたくさんあるのに、粘っこくまさぐられる口腔は、伸びてくる舌

にぺちやべちやと甘い愛撫を返してしまふ。

(だいたい佐山君ずるい。弱いとこ全部……)

抜け目のない少年は、耳たぶや首筋にもペッティングを続けている。

どうしても頭がぼわつとして、反目の意思まで奪われた。結局口が離れたときには、文句の言葉より「はぁん♡」と甘えた声が出て出る。

「なあ、聞こえるかキララ。この音」

腰を揺さぶり、耳元でささやくアキラ。

ニチュニチュと小さな音が体内を反響する。

「こんなに濡れてるのに音が少ないだろ。これ、お前のマンコが俺のにぴったりくっついてる証拠。それに形までピッタリっぽいな」

「え……？ 形まで、って」

「相性が最高つてことだよ。へへっ、俺ら、運命の二人つて感じだな」

ぐりぐりと大きな反復で結合部を揺らしてきた。

言う通り、膣道と巨肉は隙間なく密着しあっている。女教師の舌が入っている点を除いても隙間はまったくない。

(運命の……?)

急にロマンティックな単語を出されてドキッとしてしまうキララ。

そこから突如、俊哉やかよ子も含め、三人の陵辱者たちは凶つたように結合部を集中して攻めてきた。

胸とヴァギナとアヌスでイカされたさつきから一転。大人になるのを早めるおまじないのように、舌で、指で、そして男根で粘膜を様々にいたぶる。

「あああああ、ああんやだやだ、そこつ、そこそんなにイジメちゃやだあ。おかしくなるよう」

逃げ場のない恥辱と愉悦に、ふるふると金色の髪を揺らしかぶりをする。その声音はもう確かめるまでもなく濡れていた。

自信満々のアキラが、再度耳元で、

「処女膜ってなんでついているか知ってる？」

「え……？ え……」

「処女膜ってのはさ、女の子を痛がらせるためにあるんだよ。好きでもない相手に無理やりされたとき嫌がるために」

催眠術のように自信に満ちた声が、耳の穴へ、キララの脳髄へ注ぎこまれていく。

「でも好きな相手だと快感が上回っちゃう。ロストパージンで感じてるってことは、キララはもう俺が好きってことなんだよ」

「は……あ？ な、なに言ってる」

「否定できるのかよ。さつきからキララのマンコ、切羽詰って俺のちんぽに食いついてくるぜ」

ある程度は処女肉であることに気を払っていた腰使いが、力強いものになってきた。剛直は蜜でとろとろした女内を激しく抉り、揺さぶる。

ひと突きごとに控えめな白い乳房が揺れた。

キララには自覚のないことだが、アキラの自信は本当だった。突きがピッチをあげるほどに少女の膺ヒダは悩殺的なほど甘く熱肉に食いこんでいる。

そして、膺道の反応には自覚がなくても、

(はんふつ、ああうう、またアレが。またあの……すごいのがあ)

この暴悪な乱入者に対し、自分の身体がもう嫌悪を忘れている自覚はあった。

「な？ 俺のこと好きになっただろ？」

「ば、ばか言わないで。あん……っ、嫌い、佐山くんなんて大嫌いだから……っ、あつ、んあんっ」

「つめてーなあ。まあいいや、五発も注ぎこむころには分かってくれるだろ、俺のヨさ」
アキラはもう一切の遠慮をやめて腰を打ちつけた。

引くときにはヴァギナの汁気で磨かれたよう光る刀身を亀頭ぎりぎりまで抜き、押しこむときには子宮が持ちあがるほど強く根元まで叩きこむ。

もちろんケアは行き届いている。かよ子の舌が器用に柔ひだを舐めていた。優しい淫楽の隙間をぬって、剛直が敏感地帯をあばれまわる。

「くひうう、ひいひいん。やだああ、そんなにお腹突かないで、あうっ、う……おかしくなっちゃうよおお」

「なに言ってるんだ、子宮を叩くたびに身体中が嬉しそうにビクビクしてるぜ」

「そんなことっ、うあんっ、そんなことないっ」

「へへっ、Gスポット弱いんだ♪ 身体中ビクビク反応してるぜ、乳首もこんなに」

ぐりぐりと迫る侵略者に、悲憤に喘ぎながらも、キララはもう悦楽を隠すこともできない。

赤いスカートをひらめかせ、か細い肢体が大きくそつた。

めくられた乳丘の先つちよで乳首がこりこり充血している。押し重なったアキラの胸板を築きました。

調子にのつた少年が改めてキスをしかける。少女はよけようとしたが、こすられる膣肉からゾクゾクッと得体の知れない感情が起こり、交わしきれない。

「んんああ、イヤ、やううキスはだめえ」

口付けという単純な愛の儀式は、幼なじみへの裏切り行為として最たるもので。キララは嫌がる。

しかしぬぶぬぶ口腔をかき回され、同時に腰を粘っこく貫かれていると、その表情からは嫌悪の色が消えていくのだった。

キツく密着した結合部は空気の入る隙間すらなく、あまり派手な音はしない。だが本人たち同士には、ニチニチと卑猥な肉ずれ音が身体の中から届いた。

その音色ひとつひとつが情熱的に体内をこすられている証拠だ。

聞かされるうち少女は、根負けしたよう恍惚としてアキラに舌を返していった。

「さあこつちも出さず。へへ、記念の一発目だ。キララの子宮、俺のものにしてやるっ」

「え？ えう……あやつ、ふ、ふとく……っ」

荒々しく淫汁を絞りとっていた太雁が、さらにもう一段階膨らんだ。

本能のような部分でこの淫戯がフィナーレに向かっているのを悟る。フィナーレには何が待つのかを思い出し、少女は最後の力をふりしぼった。

「ぬいてっ、出すのダメ赤ちゃんできちゃうっ」

「いまさら何言っただよ、可愛い乳首ビンビンにして興奮してるくせに」

自由な両脚をばたつかせるのだが、かよ子が押さえこむまでもない。

ぐっさり深く突き刺さった男根はすでに少女の芯を占拠している。力が入らないのだ。足を力をこめようとすると、膣が反応して剛棒を食い締め、その巨大さを改めて味わうことになる。

反発がそのまま遅しきへの屈従へと変わり、

『ダメよ十萌さん、女の子は子宮に出してもらおう喜びまで知って一人前なんだから』

「お高くとまるなよ、さつきからアへ顔で喘ぎまくってるくせに」

かよ子と俊哉もトドメをさしてきた。

(やだ……やああ赤ちゃんできる。赤ちゃんできちゃうよおタダシい……つ)

追いこまれたキララが最後にすがるのは、やはり幼なじみの幻影だった。

陵辱者は当然容赦なくそんな心を犯しぬく。

悔しいことに少女自身の下半身も、淫汗を撒き散らして男の横暴に協力しており、

「く……っ、出るぞっ、出る……！」

「あつ、あつ、ダメ……出しちゃやあああつ」

金色の髪を散らし、首を横にふるキララ。

だが下半身は、おへそから下をせりあげるようにして、射精にいななく怒張を迎えに
つてしまう。

「あく……っ！」

——びゅるるるるるっつ！ びゅくくうっつ！

「ひぁ……っ、やあああ来てるっ、きてるうっ。おなかつ、熱……っ、出しちゃだめなの
にいいっ」



オスの黒い情念を刺激され、乱暴にでも小さな身体を抱きすくめた。杭はぐりぐりと根元までハマっていく。

「ああ、たまんねえ。授業中にハマちまったよ」

セクハラどころかここまで夢想していたのだろう。男は満足そうにいかつい顔をくしゃけて、インサートに食らいつく膣道の狭さを楽しんでる。

そしてさらに、

「オラお前たち、保健の授業もしておくぜ。赤ん坊はこうやって作るんだ。フフフ」

野卑極まる唸りとともに、きららを抱えたまま体操座りで待つ他の女子らのもとへと歩いていった。

「そおら注目。見えてるか、こいつがセックスだぞ」

「あ……ああ」

一歩一歩で子宮に食いこんだ肉砲が暴れる。

腹に石でも入れられたような重たい痛みに耐えていると、今度はいつの間にか、クラスメイトの前に連れられているのに気づいた。

女子たちはライカやミサトも含め、完全に陰気に吞まれている。

青空の下で始まった陵辱劇さえ本当に授業とも思っているよう、結合部を覗きこんできた。

(ウソ……ウソウソ、みんなに見られてる)

女の子同士なのだ、着替えて胸やパンツくらい見せあつたことがあつても。ヴァギナをそのまま、それも男根を咥えこまれた現場を……なんて。

「ククク、さあ十萌、お前見た目は一番ガキだけど相当なマンコ好きみたいだし。他のガキどもに教えてやれよ、セックスつてものをよ」

「え……？」

「実体験の感想つてやつをレポートすんだよ。オラつ、ここはなんだ？ この濡れ濡れになつてるトコの名前は」

ずぶずぶと打ち立てた剛杭で、細い肢体を揺するようにしながら言う。

「この名前……。ハッと目を見開くきらら。」

「そんな……つ、い、言えません」

「てことは知ってるんだな。つたく最近のガキはマせてやがるぜ」

さもしく笑いながら、男は揺さぶりを強めた。

身体が大きさがまるでちがうため、あちらにとつては腰を揺らすだけでも。きららにとつては全身が跳ねるほどの衝撃になる。

「オラ言えっ！ 言わねえか、この歳で処女膜もない淫売のココが、なんていうのか！」

「あぐっ、ううういやあ」

少女はポニーテールをひらひらさせて、首を右へ左へふるのだが、

「言えッ!!」

「っ——」

この状況でさえ自分の中に潜む魔物は、男に屈していた。

獣に吼えられ、小さな子どもが泣いてしまうように。怒鳴り声の振幅が鼓膜を揺らす。恐怖で涙があふれるとともに——。

振幅は、子宮にまでジインと伝った。

「……ち……っ、です」

ぼろぼろと涙をこぼし、同時にトロリとこじ開けられた秘道へ、熱い蜜を伝えながら、かすれた声をこぼす。

「聞こえねえぞ」

「……ちっ、……女性器です」

「カマトトぶってんじやねえぞ！ お前みたいなチンポ大好き女の膣は、言い方がちがうだろうが！ 知らないとは言わせねえぞ！」

「あぐっ、うううう……っ」

怒鳴りながら男はさらにズンズン肉砲を放つ。耳に、蜜身に、二種類の恫喝を加えられたきさらは、ねっとりした気分の中で。

(逆らえない……逆らっちゃいけない)
とうとう理性でなく、その答えを選び取る。

「……おまんこ」

自分から男の背に手を回して、ぎゅっと汗臭いジャージをつかむ少女。

「おまんこ……おまんこですつ。先生のおち……、ち、チンポが入ってるのは、私のおまんこですつ」

摩擦される粘膜の指令に従い、年齢相応に愛くるしい唇から、卑猥極まる単語を紡いでいた。

認めると同時にドツと汁気が増したのが分かる。柔らかく練れた膣壁がペニスへ吸着しだした。

『犯される女性器』だったものが、『淫らなマンコ』に変容していく。

「はぁん♡」

こすれる感触もまた痛みから快感へと変化し、きららはたまらず舌つたらずな吐息をこぼす。

おまんこ——二ヶ月前のきららは知りもしなかった言葉だ。

けれど処女を失って少女は学んだ。自慰を覚える最中、好奇心にかられてインターネットを使い、この世にはどんないやらしい言葉があるのか。

知識を吸い尽くし、嫌悪しながらも、それらの行為に妖しい興奮を覚え続けた。

「よおーし褒美をやるぞ。ククッ、ついでだ、俺様みたいなデカチンをつつこまれると、どんな風になるかも教えてやれ」

「はいっ、はいっ。あんっ、はんっ、気持ちよくなります。あああ先生みたいに素敵なチンポは、最初痛くて……でもすぐにヨクナリますうっ」

頭の中が真っ白で、できることは男に。いま自分を支配する存在に服従することだけだった。

そしてオスに屈服していると言う事実が、また少女の恍惚を煽る。

（私ってマゾだったんだ）

思った。

この二ヶ月でマゾヒストという言葉も。こうして犯され恥辱され、苦しみそのものにゾクゾクッと震えるほどの興奮を覚える人種がそう呼ばれることも、調べて知っていた。

「きらら……」

横から見ていたライカが、信じられないといった様子でつぶやく。

友人の視線を思い出すきらら。けれど、

「おうおう、マンコがいい感じになってきた。こんなに締めやがって、そんなにイイのか
十萌」

「あう……うううっ。……ああんっ、はい」

理性も、羞恥心も、ぐりぐりと『マンコ』をコネる衝撃には敵わなかった。

友達の心配よりも、ペニスを所有する主人の言葉が大事に思える。

シルクのように煌くブロンドポニテをうねらせて、首を縦にふるきらら。

「おおっ、おおおっ。ククク、たまらんなオイ」

「いや、ああん木村先生、いやああすごい」

「なにがイヤだ。ソラソラッ、突いてやるたびにイイ反応しやがって」

興奮してきたのか、野獣はまさに野生そのものの荒々しさで、速射砲のように腰を打ちつけてくる。

「あんっ、はんっ、あうう、すごい、先生ええっ」

マゾヒズムに目覚めた腔口は、どんなに激しいピストンを受けても甘くトロけて巻きついていく。それが男をより調子に乗せた。

ふと背後で友人数人がひそひそと小声で話しているのに気づく。

「お尻……」

「見てきららちゃんのお尻」

「うわ、エッチい」

花園を貫かれているきららに気にしている余裕はないが、木村の耳には届き、

「……ほほう、本当に売女だな、ケツも好きなのか」

抱っこした腕で、中央部以外はブルマでくるまれたままのお尻を抱えた。

——ヌブう……。

「っひいひいひいんっ」

排泄のための園は、見ていたクラスメイトらが気にする通り、すっかりヌメついていた。子宮を突かれて腸壁まで反応してしまったのだろう、腸液をトロトロ吐き出し、括約筋が緩んでいる。

あてられた男の指が、グリッ、グリッと回転する。すると穴は入り口だけでなく、深い部分まで口を開いて、とろーつと新たなエキスを分泌させた。

ただの指なのに、まるでドリルのように簡単に進入され、直腸の深さまでほじられる。

「んは……っ、はあああ♡ お尻は、だめえ」

「ククッ、ケツほじられてもアへっちまうのか」

ただでさえマゾの隷従感から逃れられなかったのに、弱点まで囚われてしまった。さらにはもう屈しきった様子で、男の逞しい胸板にすがりついていた。

木村は笑いながら、女子の一人に先ほど放り捨てた竹刀を拾ってくるよう言った。そして取ってきた娘に持たせたまま。

——ぐちい……っ。

「ッ……つつ、ひぁ♡」

先端で柔らかなもうひとつの穴を突く。

ブルマも、下着も、今度は守ってくれものがない。白い皮布で覆われた先つちよは括約筋を挟り、柔にほぐれた内道へと侵入しだす。

「よーし、お前ら、そいつを支えてろ。へへ、自由に遊んでいいぜ」

アヌスを貫いたまま、持ち手はクラスメイトたちに預けた。

弱点孔を同時に攻められぐったりしている少女へと、とどめの杭打ちを放つ。

渡された娘たちは戸惑いがちである。当たり前だ、いきなり友人の尻穴を犯す器具を渡されても、どうしたらいいのか。

それでも結合部を覗きこみ。みつしり果肉の詰まった膣道と、太すぎるオスの結合を見るうち、妖しい気分が伝播したのだろう。好奇心にかられて竹刀を揺すり始めた。

「はぐっ、あああう、みんな、ねえ、やだよお」

飲みこんだ孔は意外なほどネットと柔軟な反応を返すので、さらに奥へ、奥へ差しこんでみる。

「んんぐうううう……つつ、おまんことお尻、熱いの、すご……はげしすぎるのおっ」

「くくく、コスればコスるほど締まるな。ケツを犯されてもっと汁気が増しやがった」

「はああああ……♡」

二つの孔を犯されていると、快感が倍加するだけでなく、被虐の陶醉まで膨れあがるのだった。

どれだけお腹に力を入れても、竹刀はわずかにたわむだけ。

肉刀は骨でも入っているよう硬くて、まるで締まってくれない。このままでは二つの孔が開きっぱなしになってしまいうそで怖かった。

そしてその、孔が締まらない。自分の無防備な中身が隠せない状況が、マゾの快楽をいっそう燃えあがらせる。

「も、もうだめえ……。イッチャう、先生……。私っ、イッチャいますう」

「アナルまでこんなにいやらしかったとはな。いつでもケツに何か入ってないと、満足できないんじゃないか？ ん？」

天性の名器である少女の蜜肉は、濃密な一体感をもたらず。果てそうになるとオスもまた誘いこまれ、木村は湧き起こる射精感の大きさに唇を歪ませた。

「いいぜ……。うおおっ、出してやる。出すからな、全部受け止める十萌」

雄々しい肉器がこれまで以上の律動を起こした。深々と貫いて熱く子宮を持ちあげる。

見習ったように少女たちも、手にした竹刀をしならせだした。あふれてくる腸液のすべりに任せて、皮カバーがすっぽり埋もれるくらい突き立てた。

「んんあああああつ、もうっ、もうだめっ。やあああん私、もうだめえ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!